

ホンモノとニセモノ？ ホテルのチャペル挙式に思う

先日、大阪市内の某有名ホテルのチャペルで行われた知人の結婚式に出席しました。予想通り、式は外国人「牧師」(?)によって行われ、特にメッセージはなく、ありきたりの文句を日本語、英語を交えて並べただけで 10 分足らずで終わりました。確かにこの程度のものなら、英会話学校の外国人講師をバイトに雇っても大丈夫だろうというのが率直な印象でした。

数年前、無資格で結婚式の司式をしている外国人が入国管理局の捜査の対象になり、それが犯罪にあたるかどうか、問題になったことがありました。そのとき、ある外国人が、このような「ニセ牧師」はある意味で詐欺にあたるかもしれないが、それを言うなら、キリスト教信仰をもたないのにキリスト教式の結婚式を挙げたがる日本人カップルも立派な「ニセキリスト教徒」であり、それはそれでお互い様だ、というような社説を書いていました。

この社説に興味を持った私は、当時担当していた某学部のキリスト教の授業でこの社説を紹介し、学生に意見を求めたところ、「無資格の外国人が司式をしても別に構わないと思うが、それでも自分の結婚式のときだけはホンモノでないとイヤだ」というやや身勝手なものや、「自分の結婚式も別にニセモノで構わないが、そのことが自分たちにわからないようにホンモノらしくやって欲しい」というものがほとんどでした。

このような返答を聞いて、なるほどと思わされる部分もあったのですが、それでも何か釈然としないものを感じました。ホンモノかどうかということより、ニセモノであることがバレるかどうかが問題になっているように思えたからです。そういえば最近のニュースで、偽装牛肉のことが問題になっていましたが、あれは実に上手につくられていて、「ホンモノよりもおいしい」のだそうですね。ということは、今回はたまたま偽装が偶々バレたから犯罪になったが、ニセモノであってもそれがバレなければ、全然問題なかったということのなるのでしょうか。或いは、ニセモノでもバレなければいいじゃないか、というのは日本人に特徴的な考えなのかもしれません（しかし、それでもやはり、神学部の学生さんには、真理を追求する学生であり続けて欲しいと思います）。

因みに、知り合いの日本人牧師が司式をした結婚式に出席したときのこと。後ろからこんなヒソヒソ声が一「あの人、全然牧師っぽくないけど、本当に牧師なの?」。…。